－所蔵作品紹介－

佐藤　道雄　SATŌ Michio

夏樹

かじゅ

作品データはこちら

描かれているのは、旭川市内の神楽岡の森である。季節は夏。森の風景を描く作者は、植物の色があまり変化しない夏の間と、冬から初春を選ぶ。それは画面サイズにかかわらず必ず現場で対象を見つめ、細かなタッチで全体を構築していくのに時間がかかるためだ。この特色あるタッチは風景画を描き始めた頃、何度も筆先で塗り直しているうちに生まれてきたという。では塗り重ねを行っていた時、作者の内側で起こっていたのは何だろうか。おそらく自らの視覚がとらえた対象の細部と、身体全体で覚えた奥行きや広がりをともに画面上に表し出すための試行錯誤であろう。それもいたずらな省略にも、空間の観念的理解にも、叙情におぼれることにも妥協せずに実現するための苦闘ではなかっただろうか。そして彼は確かに、自らの濃密な自然体験に形を与えることに成功した。彼の絵を見る者の多くが森に包まれているような印象を口にするのが、その何よりの証しである。

佐藤道雄は水彩画・佐藤進の三男として旭川市生まれた。高校卒業後上京し、独学で絵を描くようになったが、やがて父の勧めで公募展に出品を始める。1977年に帰郷してからは市内の森を主な題材にしており、現在は新ロマン派美術協会（旭川）と道展の会員、一水会の委員となっている。日展にも数回入選しており、1990年には第33回安井賞展に選抜された。

なお、付け加えたいのは、彼の絵が現代のある科学理論を思い起こさせることだ。空間に張り巡らされた細い枝の１本１本まで余さず描き尽くしたい、と彼はいう。自然の複雑さをそのまま受け止めるこの意志は、フラクタル幾何学における自然認識の出発点と一致する。J.ブリッグス著『フラクタルな世界－科学と芸術にみる新しい美学』（原著1992年、邦訳1995年）には、カオスとフラクラルの理論に支えられて自然の不規則さをありのままとらえようとする現代の写真家と画家が紹介されているが、彼らの仕事と佐藤道雄の絵画世界を比べる時、核心が通じ合っていることに気付くだろう。それは単純化を通して真理を見つけ出すのではなく、複雑さの中に存在の奥行きを探る姿勢である。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より